

会員の広場



映画鑑賞会の楽しみ

深瀬 拓（東京）

久方ぶりに経済倶楽部の映画鑑賞会をのぞいて、中国映画「初恋のきた道」を見た。18歳の少女の思いが美しい四季の移り変わりを背景に、見事に描かれていて、すがすがしい気持ちになり、また人の思い、愛情の重さを感じ知らされた。清らかで純粋な思いが、見る人の心を揺さぶる。日常の中の非日常を感じる。

同じ気持ちにさせられた映画で、その対極からのアプローチとしては、フェリーニ監督、ジュリエッタ・

マシーナ主演のイタリア映画「道」があるように思われる。共演のアンソニー・クインがやたらに女の心を踏みつける。その先にある後悔……。

この映画鑑賞会のスタート時、「古い映画」を見るという趣旨だったので、なんとか成功させたいという思いから、「飾り窓の女」を第一作にと、なかば強引に推薦した経緯がある。この「米画」の舞台になっていたのが、とあるニューヨークの「倶楽部」で、それが推薦の理由だった。倶楽部会員の仲良し友人三人組（法医学の権威の大学教授と地方検事、医者）をめぐるサスペンスもので、あつと驚く結末が秀逸。こんなドラマはめったにお目にかかれない。今やTSUTA YAでも置いてないと思われるレアものである。アメリカの歴代名監督がサスペンス劇作のため必ず研究する一作だともいわれている。経済倶楽部にDVDがあるので、ぜひご覧いただきたい。

若い頃に見た印象が数十年たっても変わらないとは

限らないものだ。7月末に上映された「麗しのサブリナ」を学生時代に見た時は、むしろ軽薄ささえ感じていたので、まったくの時間つぶしのような気持ちでスクリーンの前に座った。ところがどっこい、である。何十年の時を経たら、ピリー・ワイルター監督のメガホンが小気味よく、大いに楽しめた。若い頃には迫りくるものがなく、期待しなかったのに、その映画の醸し出す軽妙さが妙に胸を打ったのだ。なにしろオードリー・ヘップバーンの確かな演技……、上映後に配られた解説文によると、「ローマの休日」がまだ封切られる前、ヘップバーンが自分にぜひやらせてほしい、と売り込んでの出演だったという。時間つぶしどころか、オードリーの魅力ある発声も心地よく、英語の勉強もさせてもらった。

さらに自分の若い頃のことを書きたててしまうが、若い頃は日本映画をほとんど見ていない。焼け跡派を自称する小生は完全なアメリカカぶれで、米画にどっ

ぶりつかっていた。同時に「自転車泥棒」などイタリア映画やフランス映画もむさぼるように見た世代である。それが、この映画会のおかげで、日本映画も見るようになった。

発端は友人につられて見た「浮草」だ。余韻に酔いしれた。中村雁治郎の演技力、京マチ子の、やるせない女の匂い、それにもまして、監督・小津安二郎の独特の「調べ」が最初から最後まで流れ放し。小津安の世界にすっかりはまってしまう、今や「日本映画はすばらしい」となってしまった。こうなると阿波踊りではないが、同じ阿呆なら見なけりや損々である。

このところ小生が推薦している一作に、エリザベス・テラー、ジェームス・ディーン共演の米画「ジャイアンツ」がある。長尺もので、長すぎてダメと、「映画館主」の横谷さんには上映を渋られているが、こちらもめげずに「二回に分ければいいじゃない。名作中の名作だよ」と、こりもせすに迫っている。